

伝統を受け継いで

須波小学校には『須波っ子太鼓』という宝があります。先輩方から技を受け継ぎ、演奏を続けているのです。

先日、東部教育フェスティバルに出場し、『須波っ子太鼓』を発表しました。発表順番が近づくに連れて緊張感が増していき、気を引きしめて出番を待ちました。

いよいよ本番。舞台から観客席をながめると、家族全員の顔が目に飛びこんできました。家族がきてくれていたといううれしさとともに、緊張で、頭の中がいつぱいでした。ぼくのかげ声・打ち出しで演奏がスタート。バチを持つ手に汗がにじみ出る。「練習通りに。」と、自分に言い聞かせる。演奏は大成、百パーセントの力を出しきることができました。

家に帰ると家族は、「強弱がはっきりして感動したよ。」と言ってくれました。ぼくは正直なところ、自分の役割を果たすことができるかという不安もあったけれど、家族からの一言で、「やってよかった。」と思うことができました。

ぼくたちは、協力して演奏することで見る人に感動を与えることができました。そして、『仲間と協力し、最後までやり切るといふことの素晴らしさ』も感じることができました。

1月の行事「ふれあいフェスティバル」がぼくたち6年生にとっては最後の演奏の場です。伝統の思いを2本のバチにしっかりこめて、『須波っ子太鼓』という宝を、胸を張って地域の方に披らうします。そして、後輩たちに心と技をしっかりと引き継いでいきます。



わがまちに望む夢

三原の未来を担う子ども達の声を紹介します
—連載第16回—

大好きな深町そして深小・・・

深町のいいところは、町の人同士が強い絆で結ばれているところと、自然が豊かなところです。私は深町が大好きです。人々の温かさや自然の豊かさの中で暮らしていることはとても幸せなことだと思います。

人がつながっているというところは、東北の震災の時に注目された何か大変なことがあったときに協力して、やりとげることができることだと思います。例えば、私が帰っている時、「野菜いるか。」と、近所のおじさんからよく声をかけられ、野菜をもらいます。自分の家でも、近所の人に野菜を配ることもあります。また、地域の人を招いての行事などがたくさんあり、大人の人たちは顔見知りで、会うたびに仲がよくなっています。

もう一つは自然の豊かさです。深町には、たくさんの桃畑や梅林があり、とびきりおいしい実がなります。学校では、授業で山に登ることもあります。きつと都会では考えられないのではないのでしょうか。山にはいろいろな発見があり、そこにいるだけで冒険している気分になります。

もっといい深町にしていきたいためには、一人ひとりが深町のことを考えて、努力することが大切だと思います。

また、私たちの深小学校には、自慢できるところがいっぱいあります。まず、高学年や班長がみんなに気を配り、登下校の並び方がよいところです。横断歩道を渡る時には、止まってくださった車にみんなでお礼をします。次に、挨拶がよくできることです。深小学校には、挨拶「大名人」がいっぱいいます。挨拶大名人とは、「大」きな声で、「名」前をよんで、「人」より先に挨拶することです。深小学校では、挨拶がいつでもどこでも行われています。それから、時間を守ることができるとです。5分前には集合したり、行動したりしています。だから、休憩時間が終わっても残って遊んでいる人や、そうじが始まってもしない人は一人もいません。これってすごいことだと思います。最後に、各学年が目標に向かってがんばっていることです。私達6年生には、「積極的」という目標があります。行事の準備や片付けは全員仕事を見つけて積極的に仕事をします。授業中にはもちろん積極的に発表したり、話し合ったりしています。

このように、深小学校には、たくさん自慢できるところがあります。この四つはあたり前のことかもしれませんが、けれど、あたり前のことをあたり前にできることが深小学校の自慢です。私たちはこれからも、あたり前のことをしっかりやっています。

